

平成 24 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第 37 回校内読書感想文コンクールの審査結果を發表します。学生の皆さんから、1 年生 195 編、2 年生 194 編、3 年生 16 編と合計 405 編の応募がありました。昨年度に引き続き応募総数が 400 編を超えたことを喜ばしく思います。情報メディア教育センター運営委員会の教員 9 名と国語科教員 2 名による審査・投票の結果、その中から次のように 7 名の入選作を決定しました。すでに 1 月 7 日の全校集会放送でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽を称えたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

今年度は飛び抜けて評価の高い作品はなく、選考には苦慮しました。僅差で佳作となった作品も多くあったことを申し添え、来年度の応募に期待します。

最優秀賞

該当なし

優秀賞

機械工学科 1 年	大前 雄也	支配された世の中
機械工学科 1 年	松内 秀直	大人に近づく子供 - 『エイジ』を読んで -
情報工学科 1 年	辻 悠一郎	僕の数学への考え方 - 『なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?』を読んで -
物質化学工学科 1 年	山本 峻也	ハイジと走に学んだこと - 『風が強く吹いている』を読んで -
機械工学科 2 年	鈴木 耕太	『物理屋になりたかったんだよ』
物質化学工学科 2 年	小柳 伊代	本物のエンタテインメント
物質化学工学科 2 年	隅谷 大良	正義の味方と殺人犯 - 『罪と罰』を読んで -

佳作

1 M 上田 誠也	1 E 伊庭 由季乃	1 E 土橋 果歩	1 E 豊永 喜健
1 S 酒井 垂規行	1 S 前川 哲志	1 熊本 祐馬	1 C 岡本 悠介
2 M 潮田 昂士	2 M 森 一太	2 E 板坂 将希	2 E 大西 将樹
2 E 北村 拓海	2 S 中谷 裕美	2 I 久保 基	2 I 長江 優花
2 西岡 祐希	2 C 川原 歩夏	2 C 黒崎 澪	2 C 澤田 廉
3 M 早瀬 康洋	3 東口 充希		

以下にそれぞれの入選作品について、簡単に講評しておきます。

1 M 大前さんの作品は、コンピューターが人間を支配することの恐ろしさから、人間とコンピューターのつきあい方について述べたものです。星新一の短編(「ショートショート」と呼ばれています)を題材に、受け身ではなく積極的な姿勢を持つことで、コンピューターやメディアと人間がよい関係を築く可能性について考えています。

ちなみに、星新一のショートショートは、原稿用紙 10 枚(文庫本なら 6 ページほど)の短い分量で、人間社会をうまく描き出しています。科学の発達と人間との関係を題材とした作品も多く、個人的には「おーい でてこい」(『ポッコちゃん』所収)などをお勧めします。

1 M 松内さんの作品。「ペダルを強く踏み込んだ。プチプチプチプチッと、チューブがちぎれていく。ぼくはどんどん身軽になる。」この引用が効いています。主人公の栄司は中学二年生。おそらく感情移入しやすい本だったと思います。松内さんのこの本に夢中になった気持ちがよく表れた文章です。欲を言えば、もう少し本の内容を入れたほうがよりわかりやすかったのではないかと思います。

「読書感想文なんてどう書いていいのかわからない」という人もいますが、まず、本の内容をある程度

紹介してもらする必要があります。それをふまえ、自分の体験、身の回りの出来事と関連づけて、考えたことを自分の言葉で述べるようにしてください。あらずじばかりでは困りますし、かといって、どのような本かわからないのも、感想文という、ある意味本から独立した「作品」としてはもの足りないものとなります。

さて、高専には、中学生の時、数学が得意だった学生も多くいることでしょう。しかし、高専に入学してから、数学を難しく感じる、中にはあまり好きでなくなった人もいないでしょうか（高校でも同じですが）。

1 I 辻さんの作品は、そういう人にぜひ読んでほしいものです。「数学＝理系ではない。」この書き出しが効果的です。日常生活でも数学的な発想・ものの見方が重要であることを上手にまとめています。惜しむらくは、辻さんも文字数が若干少なかったことです。せっかくよいテーマを取り上げていますので、もう少し考えを深めてもらえればと思いました。

1 C 山本さんは、本校の学生にも人気のある『風が強く吹いている』をうまくまとめています。毎年正月に行われている「箱根駅伝」を題材とした三浦しをんの本ですが、感想文の書き出しを印象的な部分の引用からはじめ、自分の考えたことが二つある、と要約し、それぞれについて、本の内容を紹介しながら述べています。高専の5年間はどうしてもどこかで中だるみの時期があります。山本さんの言うように、悩んだり落ち込んだりしたときに、本によって励まされることがあります。

2 M 鈴木さんは、ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊の本を取り上げました。最後のほうで「研究者には人付き合いの能力が必要であることを知った」と書かれているように、小柴さんの研究と人とのつながりを紹介しながら、自分の考えをまとめています。皆さんにもぜひ読んでほしい一冊です。

2 C 小柳さんの作品は、タイトルが工夫されています。人気グループ EXILE について書かれた本を読んで、自分の吹奏楽の体験に引きつけ、「エンタテインメント」とは何か、よく考えています。以前は漫才師の本なども学生に人気がありましたが、どの分野であれ、きちんと仕事をしている人は自分なりの流儀を持っています。音楽もまた、人を励ます素晴らしい力を持っています。

2 C 隅谷さんは、ドストエフスキーの名作に挑戦しました。読破したというだけでも感心しますが、たとえば「戦争」という状況では、「殺人」が正義となるのか、また殺す「権利」はあるのかといった難しい問題についてよく考えています。「殺人」は、身近なものではないと思いますが、誰かにちょっと「復讐」したい、という考えが頭をよぎることはあることでしょう。その時に皆さんにも考えてみてほしい問題です。

今年度も、初参加の1年生の健闘が目立ちました。今年の1年生はよく本を読んでいるという印象がありましたが、その成果の現れでしょう。また、2年生以上の学生も、読書の習慣がついている学生が多くいることと思います。これからも大いに本に親しんでください。そしてできれば、自分の読んだ本について簡単な記録（書名と著者名だけでもよい）をとってみてください。パソコンや携帯電話に入れておいてもよいでしょう。あとで見返したときに、自分の財産として感慨深いものがあるはずです。

最後に、多数の応募作が寄せられたことに感謝するとともに、次回も引き続き学生の積極的な取り組みに期待します。

(国語科：鍵本)



読書感想文入選者と多読表彰された皆さん（クラス多読は代表者）